様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　１５日現在

機関番号：38004
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：21520390
研究課題名（和文）文学・視覚メディアにおける「沖縄人」の＜顔＞の表象についての研究

研究課題名（英文）Representation of “Okinawan faces” in literature and visual media

研究代表者
本浜　秀彦（MOTOHAMA HIDEHIKO）
沖縄キリスト教学院大学・人文学部・准教授
研究者番号：60441961

研究成果の概要（和文）：本研究は、近現代の日本の文学作品（小説、詩など）や視覚メディア作品（写真・マンガなど）における、「沖縄人」の＜顔＞の表象について分析し、「沖縄人」の＜顔＞が、「沖縄」のイメージとともに、歴史的、社会的文脈においてつくられ、提示されてきたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：By analyzing modern and contemporary Japanese literary texts and visual media, this study has demonstrated how images of “Okinawan faces” with images of “Okinawa” have been shaped and represented by social and historical contexts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：表象、顔、文学、視覚メディア、沖縄

１．研究開始当初の背景

近年、ポストコロニアル研究や歴史研究における「国民国家」研究などの分野で、「沖縄人」というカテゴリーが、日本という近代国家の形成の過程において、「非日本人」の概念として構築されたことが論じられた。けれども、そうした近代国家の「からくり」自体はすでに明らかになったにもかかわらず、「沖縄人」というカテゴリーが、未だ意識的、無意識的に人々の中で立ち上がることを指摘することは難しいことではない。

もちろん、「人種」（race）といった観点から「沖縄人」を抽出することは、近年の生物学や人類学などの研究成果からは否定される。だが、それでも、「沖縄人」というカテゴリーや、その手掛かりとしての「沖縄人」の＜顔＞は存在しているのではないか。そのことを「人種」問題の議論と関連させれば、「黒人」という「人種」は否定されても、「黒い」皮膚をした人の＜顔＞は、そう認識する人にはそう認識され、存在する、ということである。ただし、そうした「境界線」は、実は人々の崇高な哲学や自己認識に必ずしも基づくものではなく、「他者」の＜顔＞に対する経験的な認識によって行われていることも少なくない。＜顔＞を通しての人物評価

がしばしばまかり通るのも、この人と人の間に残された＜顔＞という＜不思議なもの＞の存在があるからではないか。

本研究の問題設定は、「沖縄人」というカテゴリーが立ち上がる問題を、「沖縄人」という自己認識やアイデンティティーといった意識の問題ではなく、目に見える存在としての「沖縄人」の表象、中でも＜顔＞の表象の問題として捉え直したいということを契機にしている。

２．研究の目的

本研究は、近現代の日本の文学作品（小説、詩など）や視覚メディア作品（写真・マンガなど）において、「沖縄人」がどのように表象されてきたのか、身体の中でも特に他者を認識する重要なコードである＜顔＞に焦点をあてて分析するものである。

「沖縄人」の＜顔＞の表象の解読を通して明らかにしたいのは、「沖縄人」というカテゴリーが、どのような歴史的、社会的文脈において存在し、その中で「沖縄人」の＜顔＞がどのように表象されてきたのか（表象されているのか）、またその反対にある「非・沖縄人」の＜顔＞がどのように表象されてきたのか（表象されているのか）、そして、それらがどのような社会的、文化的な意味を持っているのかということについてである。

表現者たちによって捉えられ、知覚され、さまざまな媒体に載せられて表象されてきた、「自己」と「他者」の間に残された＜顔＞を徹底的に問い直すことこそ、逆に「自己」と「他者」の新しい関係性を探る鍵として捉えたい。

３．研究の方法

本研究には、「非・沖縄人」と分けられて認識される「沖縄人」の＜顔＞という存在へ大きな関心を払って、多様なテクストの表象を分析する作業が不可欠である。「沖縄人」の＜顔＞が表象されているメディアとして本研究が特に力点を置いて分析したメディアは、小説や詩などの文学作品、絵画、写真、広告、マンガである。それらの作品を鑑賞したり、各種資料を入手したりするなどして、表象分析をするというオーソドックスな手法で研究を進めていく地道な作業を重視した。

「沖縄人」の＜顔＞の表象を分析するにあたっては、おおまかな時代区分を予め意識した。第 1 期を明治期、第 2 期を 1910－1920 年代、第 3 期を戦争直前から戦後の 1950 年代、第 4 期を 1972 年前後、第 5 期を 1995 年ごろから現在とするものである。

第 1 期は、1879 年の「琉球処分」を経て沖縄が日本という近代国家に制度的に編入されていく時期である。第 2 期は、日本の文化人（柳田國男、折口信夫ら）が沖縄訪問をし、彼らが伊波普猷ら沖縄の知識人と交流をもちながら、いわゆる「沖縄研究」が登場してくる時期である。第 3 期は、戦争直前に柳宗悦らが巻き起こした「方言論争」が起こった頃から、地上戦に巻き込まれた沖縄戦を経て、戦争の傷跡が大きく残り、米軍の統治下に置かれた戦後の時期である。この第 3 期における、アメリカによる「沖縄」表象も決して無視できない。第 4 期は、沖縄の施政権が日本に返還された、いわゆる 1972 年の「本土復帰」前後に登場してきた沖縄表象である。第 5 期は沖縄が基地問題で大きく揺れるきっかけとなった米兵による少女暴行事件が発生した 1995 年を特に転換期として注目し、この年以降、沖縄を描く映画、テレビドラマなどの作品が急増して、「癒し」のイメージが沖縄に重ねられた経緯も追った。以上の五つの大まかな時代区分を意識しながら、＜顔＞の表象がどのように行われたのかを詳細に検討した。

４．研究成果

３で記述した時代区分、メディアの種類に基いて、注目すべき「沖縄人」の＜顔＞の表象を、メディア特性などを考慮しながら以下のように整理した。これは後述するシンポジウムでも示すなど、本研究の大まかな全体像を示すことにもなった。

（１）［小説］広津和郎「さまよえる琉球人」（1926 年）

雑誌『中央公論』1926 年 3 月号に発表されたこの作品は、作者の広津とおぼしき小説家のところに出入りする沖縄出身の男性をモチーフにした作品である。発表直後、沖縄青年同盟から、題名などからくるイメージで、沖縄県人が「誤解をうける恐れ」があるとの抗議を受けて、広津自身が「封印」した作品としても知られる。この作品の中で、石油焜爐売りとして登場する「琉球人」見返民世（久米島出身の嘉手苅信世（冷影）がモデル）の顔を描写する場面がある。

（２）［米軍報告書］『琉球列島の沖縄人―日本の少数民族』（*The Okinawans of the Loo Choo Islands: A Japanese Minority Group*）（1944 年）

同報告書は、沖縄戦の前年に、ハワイの米軍戦略局調査分析部が沖縄研究の成果としてまとめたものである。ハワイ在住の沖縄からの移民を主な対象として分析したこの報告書は、当時の米国の人類学の研究成果を結集した側面をもつ。その中で、沖縄の住民の身体的特徴が、ほかの日本人ほど「東洋人的」ではなく、さまざまな人種の要素が指摘でき

るという見方を示している。顔の特徴としては、「「内地人」と比べ、鼻が大きく、額が広く、頬骨は発達していない。肌は浅黒い」という点を挙げている。なお、この報告書には、沖縄系移民 15 人（男性 10 人・女性 5 人）の正面や横顔の写真が掲載されている。

（3）［映画］「ひめゆりの塔」（1953 年、61 年、68 年、82 年、94 年）

沖縄戦に動員された「ひめゆり学徒隊」を描いた劇場公開用に製作された映画は、これまでに 5 本あり、公開順に並べると、①今井正監督『ひめゆりの塔』（1953 年）、②小森白『太平洋戦争と姫ゆり部隊』（61 年）、③舛田利雄『ああ　ひめゆりの塔』（68 年）、④今井正『ひめゆりの塔』（82 年）、⑤神山征二郎『ひめゆりの塔』（94 年）。中でも、①は、沖縄戦の「悲劇」や、少女たちが犠牲になった「ひめゆり部隊」のイメージを、日本の中で広めるきっかけになるほどの大きな影響力があったことがしばしば指摘される。これまでに、香川京子、吉永小百合など、日本を代表する有名女優たちが「ひめゆり学徒隊」を演じている。裏を返せば、女優たちがつくりあげた「沖縄人」（ウチナーンチュ）の「顔」に、長く、沖縄戦の「悲劇」が集約されていたということができる。

（4）［映画］ダニエル・マン監督「八月十五夜の茶屋」（1956 年）

占領下の沖縄を描いたこの作品では、ハリウッドの往年の名優マーロン・ブランドが、通訳をまかされた村の青年サキニ役を演じている。陸軍兵士として沖縄戦とその後の占領に関わったヴァーン・スナイダーの同名の小説（1951 年）が原作で、それをもとにジョン・パトリックが脚本を書き（1952 年）、その舞台がブロードウエイで大ヒットしたことが、映画化につながった。

（5）［絵画］名渡山愛順（1906～1970）の「女性像」

米軍占領下の沖縄で、軍政府の文化保護政策の後押しなどもあって、現在の那覇市首里儀保町に建設された「ニシムイ美術村」にアトリエを構え、数多くの作品を生み出した洋画家であり、衰退した琉球絵画にかわる、沖縄の新しい表現を模索した。中でも、憂いを帯びた表情が特徴の女性像は、占領下にあった沖縄の文化や伝統の再興をめざしたこの画家の思いが託されていると評価される。

（6）［映画］中島貞夫監督「沖縄やくざ戦争」（1976 年）

沖縄の施政権が日本に返還された「本土復帰」（1972 年）前後に、実際に沖縄で起きた、地元のやくざ組織と本土暴力団との抗争をもとに描かれた東映の「やくざ」映画である。松方弘樹、千葉真一、渡瀬恒彦、地井武男などが、顔に茶褐色のメークアップを施して「沖縄人」やくざを演じている。戦後の 1950—60 年代に描かれた沖縄の「物語」の特徴が、沖縄戦などの「悲劇」であるとするなら、本土復帰前後の特徴は、沖縄と本土とのわだかまり、あるいは「対立」の構図である。その点で、「沖縄やくざ戦争」は、復帰後間もない沖縄の混沌とした“情念”を、映画における“バイオレンスもの”の形式を借りて表出した作品とも言える。

（7）［マンガ］『コミックおきなわ』の作品群（1987～90 年）・なかいま強「わたるがぴゅん」（1984～2004 年）

沖縄のマンガ家が、主に沖縄を題材に描いたマンガを、「オキナワン・コミックス」というジャンルと呼ぶことができる。その登場を促したのが 1987 年から 90 年にかけて発刊されたローカルマンガ雑誌『コミックおきなわ』である。その作品群には、沖縄的な身体や顔を意識的に描いた作品が少なくない。例えば保里安則の「ゲレン」では、毛深い沖縄青年が、面白おかしく描かれるなど、沖縄的身体への意識が強く出ている。『月刊少年ジャンプ』で連載された「わたるがぴゅん！」は、沖縄出身の主人公が、中学野球で大活躍するマンガだが、台詞でしばしば使われた沖縄語（ウチナーグチ）とともに、沖縄の身体的感性が表出するキャラクター造形（「がっぱい宮城」など）が見られた。

（8）テレビドラマ　岡田惠和脚本「ちゅらさん」（2001 年）

NHK が製作した同連続ドラマは、小浜島生まれの、“沖縄の太陽のような明るい性格”のヒロインが、周りの人たちに愛されながら、沖縄本島、東京で生きていく、その日常を描いた作品である。1990 年代後半以降に登場してきた、沖縄を「癒しの島」として描く、映画やドラマの代表的な作品でもあり、また同作品以後に続く沖縄を舞台にしたさまざまな物語に与えた影響も大きい。ヒロインには、沖縄出身の女優（国仲涼子）が起用されるなど、実際の沖縄出身者の配役が目立つのもこのドラマの特徴である。沖縄の芸能人が特に 1990 年代以降、幅広く活躍し始めたこともその背景にあるが、沖縄の「顔」が、沖縄出身の俳優の「顔」によってようやく提示されるようになったという側面があることを指摘することができる。ただ、ドラマの登場人物たちのせりふには、ステレオタイプ化された「沖縄人」像を指摘できる。

上記のように並べた、特に重要な作品（群）を踏まえながら、本研究では以下の結論を導

き出した。

① 多くの表現者が（とくに絵画、映画、写真などの視覚メディアで）、意識的・無意識的に「沖縄顔」を描いてきた。

② 「沖縄顔」が、沖縄の「外」側からとらえられ、示されることが長く続いた。（「内」からイメージする「沖縄の顔」とのギャップ？「大和顔」ではない、「沖縄顔」に自信を持てなかった？）

③ 1990 年代以降､「沖縄の顔」に対する、「沖縄人」の意識が大きく変化してきている。また、実際に「沖縄の顔」も変わっている。

「沖縄人」を描いた作品は膨大であり、すべて表現を詳細に検討するのは本研究では制約があったが、少なくとも､「沖縄人」の＜顔＞の表象をめぐる大きな流れを把握することができ、また提示した仮説は十分な有効性を持つものと考える。

また、本研究の最終年度（2011年度）は、当初より研究成果を地域へ情報発信する年度と位置づけた。そのハイライトである「顔」の表象をテーマにした講演会・シンポジウムを、2011年12月17日（土）、沖縄キリスト教学院大学で開催した。約3時間に及んだその内容は、①県外から招聘した人類学研究者の基調講演、②シンポジウム（基調講演者に、県内外から招いた映画研究者、写真家、ヘアメーキャップアーティストを加えた4人のパネリストが登壇、コーディネーターは研究代表者が務めた）、③質疑応答、であった。

同シンポジウムには、学生、一般市民、研究者を含む約120人の出席があり、質疑応答の際には、フロアからの質問に対して、基調講演者をはじめ各パネリスト、コーディネーターが答えた。講演会・シンポジウムの開催に合せて、当日をはさむ1週間は、同じく大学内で、研究代表者の授業を受講する学生が撮影した「顔」の写真を展示する写真展を開催した。

講演会・シンポジウム開催にあたっては、地元紙に関連記事掲載を依頼するなど、告知・宣伝を積極的に行った。開催を案内する記事として、『琉球新報』12月4日付文化面（19面）には、パネリストの一人による「「顔」は何を語るか」が、『沖縄タイムス』12月15日付文化面（13面）には、研究代表者の「「沖縄」の現在探る」が、それぞれ1000字前後の分量で掲載された。講演会・シンポジウムのために作成したポスター・チラシには、研究課題と科研費を受けての開催である旨を明記した。

以上のような情報発信を通じて、コミュニケーションの「場」としての「顔」に対する地域の関心を高めることができたと考える。

また、2010年に発刊した『手塚治虫のオキナワ』（春秋社）の中で展開した、マンガ表現における人と動物の「顔」の描かれ方などの分析においても、間接的ではあるが、本研究の成果を盛り込むことができた。さらに本研究の展開は、「仮面」、「化粧」という「顔」の表象に隣接する重要なテーマも浮かび上がらせるなど、研究の幅を広げることにもつながった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①本浜秀彦、沖縄キリスト教学院大学論集、学内紀要、査読無、第７号、2010、1－11

６．研究組織
(1)研究代表者
本浜 秀彦（MOTOHAMA HIDEHKO）
沖縄キリスト教学院大学・人文学部・准教授
研究者番号：60441961

(2)研究分担者　　該当者なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者　　該当者なし
（　　）

研究者番号：